

表題：瑞穂町協働フォーラム2018 概要

主催

瑞穂町・瑞穂町協働のまちづくり推進委員会

日時・場所

平成30年3月4日（日曜日） 午前10時30分～午後3時30分
郷土資料館けやき館

出席者数

	参加人数
一般参加者	57人
瑞穂町協働のまちづくり推進委員	8人
事務局（部課長含む）	5人
合計	70人

配付資料

〈フォーラム当日資料〉

- 1 「瑞穂町協働フォーラム2018」チラシ
- 2 基調講演レジュメ
- 3 「瑞穂町協働フォーラム2018」アンケート
- 4 協働事例紹介レジュメ（中沢副委員長・井上委員）
- 5 西多摩マウンテンバイク友の会 概要

〈各種お知らせ、ちらし等〉

- 6 町内会・自治会に加入しませんか（地域課）
- 7 さやま花多来里の郷（建設課）
- 8 けやき館・耕心館パンフレット（郷土資料館）
- 9 ヒッポファミリークラブ（推進委員）
- 10 高根市（推進委員）
- 11 ボランティアセンターみずほ概要（推進委員）
- 12 ボランティア通信（推進委員）
- 13 囲炉裏端で語る昔話 小泉八雲の雪女（推進委員） けやき館イベントチラシ

開会あいさつ及び基調講演

(司会・栗原) 本日はお忙しいところ、フォーラムにご参加いただきまして、誠にありがとうございます。私は本日の進行を務めさせていただきます、住民部地域課の栗原と申します。よろしくお願いいたします。協働フォーラム 2018 は、郷土資料館けやき館及び耕心館で開催しております「みずほ雛の春まつり」とのタイアップ事業ということで、けやき館のご協力のもと、瑞穂町協働のまちづくり推進委員会と、その事務局である町との協働で開催しております。ここで本日のフォーラムの内容を簡単にご説明します。はじめに、辻山講師による基調講演、次に瑞穂町協働のまちづくり推進委員会の井上委員、中沢副委員長から活動事例発表があります。講演の資料は受付の際、お渡ししました封筒の中に入っておりますので、ご確認ください。講演終了後、講師から総評をいただき、その後は各委員の紹介となっております。講演はここで一旦終了となりますが、1階の会議室・体験学習室の前の廊下・外のあずまやの横では活動紹介のパネル展示や体験コーナーもありますので、ぜひお立ち寄りください。また、封筒の中にはアンケートがございますので、ご記入いただき、お帰りの際は受付にあります回収箱に入れていただきますよう、よろしくお願いいたします。

本日は、広報みずほなどの取材のため、写真撮影をさせていただいております。あらかじめご了承ください。撮影に関して何かございましたら、撮影している職員にお申し出ください。それでは瑞穂町協働フォーラム 2018 の開会挨拶を瑞穂町協働のまちづくり推進委員会香取委員長よりお願いいたします。

〈開会挨拶〉

(香取委員長) おはようございます。本日はお忙しい中、瑞穂町協働フォーラム 2018 にお越しいただき、誠にありがとうございます。私は瑞穂町協働のまちづくり推進委員会委員長を務めさせていただいております香取幸子と申します。よろしくお願いいたします。

平成25年に瑞穂町の協働を考える会議がスタートし、「瑞穂町協働宣言」の策定、「瑞穂町協働宣言の実現に向けた提言書」を町長に提出しました。

そして、平成27年には「瑞穂町協働のまちづくり推進委員会」が発足し、協働をより多くの町民の皆様にご存知いただくための方法を模索し、実践していくところであります。この協働フォーラムもひとつの方法で、今回で3回目となりました。協働とはどんなことだろうと、疑問を持たれる方がたくさんいらっしゃると思います。この後の辻山先生の基調講演を聞いていただき、協働の基本理念を知っていただければ幸いです。そして、その後に、実際に協働の手法を活用して町を豊かにしようと活動しておられる井上さんと中沢さんの事例発表があります。けやき館全体を使って、ブースや展示物を展開しておりますので、講演後ご覧ください。



私も協働のシステムを利用して元狭山コミセンでサロンを立ち上げて、参加者の皆さんと楽しんでおります。何か困った時とか、悩んだ時に、どうやって活動を広げていこうかと立ち止まった時に地域課に行って、相談をしていただくと、他の課とつないでくれたり、役場以外の方とつないでくれたりする職員がいますので、ぜひ協働という活動を利用して、皆さんの生活が豊かになる方法を見つけていただければと思います。最後になりましたが、私たち推進委員の活動を温かく見守り、優しい助言をしてくれる辻山先生、並びに瑞穂町地域課の職員に心から感謝を申し上げ、開会の挨拶とさせていただきます。

(司会・栗原) 香取委員長ありがとうございました。続きまして、基調講演に移りたいと思います。本日の講師は、地方自治総合研究所所長の^{つじやまたかのぶ}辻山幸宣講師です。辻山講師は平成24年度から瑞穂町の協働施策推進アドバイザーとして、瑞穂町協働宣言の策定にあたり適切な助言等で、ご尽力をいただきました。また、今年度は町職員を対象とした協働研修を実施し、その研修の講師も務めていただきました。本日の講演は「協働のまちづくり」ということですが、協働とは何か、そして協働のまちづくりについて考える良い機会であると思います。それでは辻山講師よりよろしくお願いいたします。

<基調講演>

(辻山講師) おはようございます。雛まつりの行事のひとつとして行われるということで、大変興味深く心待ちにしていました。会場を見て回ると雰囲気わかります。いろいろな方が足を運んできて、その中から興味がある方はこのフォーラムに来きます。雛まつりの仕掛けは住民たちが汗を流して準備し、施設を借りて行うという、ひとつの協働の形であると思っています。先程ご紹介があったように、瑞穂町の協働施策推進アドバイザーを引き受けてからこれまで推進委員の皆さんと一緒に考えてきた協働という意味を話してみたいと思います。

最初に、よく使われる言葉として、我が町という言葉がありますが、どういう意味でしょうか。選挙権が行使できる範囲が我が町なのでしょう。だとしたら、代表を選ぶために住民一人一人が一票を持っているのでしょうか。そんなことを考えますと、そもそも町は住民たちによって作られたものだと思います。そして協働との関係はどうかと言うと、町を作ったのは住民ですから、本当に町を良くしようと思ったら、住民がやろうとしていることについて、役所は力を貸すけれど、命令はしない社会を協働型社会と言います。学問の世界では新しい公共と言ったりします。

今から古い話をしますが、どうやって集落を治めていたかと言うと、大名や町奉行が治めていたわけではなく、そこに住んでいる住民たちです。例えば、大雨が降ると道が通れなくなりますので、晴れたら集落の人みんなでやろうとなります。一世帯から男性1人女性1人を出して、共同作業で解決します。道に砂利を敷いたり、橋が壊れていたら橋を掛けなおした

り、様々な事やって問題を解決していったのです。そして多くの場合、女性たちは作業している男性たちのためにご飯を作ったりしていました。このようなことは、現代で言えば、公共事務で主として役所が担当している範囲ですが、全部自分たちでやらざるを得なかったわけです。その段取りを決めていたのは、一般には村寄り合いと呼ばれるもので、それは一世帯から一人代表が出てきて相談をする場所でした。



それからもうひとつ大きな課題になっている保育や待機児童問題がありますが、この問題は昔からありまして、夫婦で働きに出た時に子どもをどうしようとなります。かつては家族が協力して支えました。単純に言うと、夫婦が働きに出ている間は祖父母が孫の世話をします。そして、孫が成長し、祖父母が年老いて体が弱ってきたら、今度は家族と子どもたちが世話をし、死ぬまで支えるという関係があって、生活が成り立っていました。

そして、三点目は互助と言って、隣近所の人たちが力を出し合って、個人的な課題を解決します。例えば、家を建て替えたいとか、屋根の葺き替えをやりたいとか、全部自分でやらなければならないことなんですけど、みんなで手伝って、棟上げの時には餅やお菓子を配ったりして、助けてくれた人たちに対してお礼の気持ちも含めてお祝いをする儀式であったと言われています。

このように、家の周りのこと、家族のこと、自分の家の新築や増築に関することについても、地域の人たちがそれぞれに力を出し合って解決していきました。かつての結と呼ばれる相互扶助組織が30年ぶりに動いたという記録がございました。NHK特集で白川郷の屋根の葺き替えの時に住民が出てきて自分たちでやったということが注目されて、話題となりました。今ではコミュニティと言ったりして、意味がわかりづらくなったりしているんですが、要は共同作業と家族の協力と相互扶助、この3つの要素があれば村は治まったと考えられています。

それがなんでうまくいかなかったのかというと、明治維新が起きて、やがて日本も産業化が進んでくると、工場ができたり、新しい仕事が発生して、村に住んでいる人たちが通勤をする、つまり通うということを始めたりします。そうすると、共同作業の日を定めても、自分の仕事があるからと言って、休む人が出てきてしまうわけです。最初はやれる人だけでやっていましたが、逆に出ていない人たちが押し付けて悪いということもあり、不平等ということが広がりました。そこで出不足金というものが始まり、出られなかった人たちがお金を払うということです。今日まで風習として残っている地域もたくさんあります。そのお金を使って、均衡しながら対応していましたが、その後、出てこられる人たちが少なくなってきました。そうすると作業そのものが出来なくなってしまいますので、村寄り合いで話し合いながら住民から少しずつお金を集めて、公共事業を代わりにやってくれる人を見つけようと考え、人を雇うことを始めました。本来、自分たちで処理していた業務が出来なくなりましたので、代わりにやってくれるメンバーを探して、お願いしたということです。やがて、その仕事は様々なことに及んでいきます。例えば、伝染病患者が出たら、隣の医者

を連れてくるとか、その後の伝染予防や公衆衛生だとかをやってもらう。明治維新になって新しい中央政府ができて、それぞれの集落をそれぞれの土地で位置づけていこうとしました。これが行政の始まりです。町役場というものができて、そこが地域の公共的な仕事を担うという役割になった、このことは世界の自治体ができる歴史で共通していると思われています。つまり住民たちが困りきって、自治体を作り、行政という専門家にその地域を任せて、その行政に指令を出して、経費の管理もする議会を作り、選挙で代表を選ぶという流れになってきたということ。自治体ができる、その中に行政の部門と議会の部門ができて、大体、形ができるのは明治11年ぐらいだと思っていますが、郡区町村編制法という法律ができて、それによって集落には議会を置くということが指示されました。今は市町村が1700ぐらいですが、その当時78000だろうと言われていています。それが合併を繰り返して、今の1700になるわけです。集落が78000ですが、人口は全国で3000万人ぐらいで、ひとつの町の人口は少ないわけです。その中で選挙で代表を選ぼうとしても、なり手も少ないし、選ぶ人も少ないということで合併ということを考えました。集落を束ねてひとつの町村にして役場を置こうという発想になって、いよいよこの国に自治体政府と言われるものが誕生していきました。その後の歴史は、拡大の一途をたどり、役場はどんどん仕事を増やしていき、戦後に大きな変化が生まれ、さらに行政が拡大していきました。それはなぜかと言うと、地域に住んでいる住民の行動の変化がありました。戦前には地域のために、お国のために、みんなが協力してその町を支えていましたが、第二次世界大戦で敗北して多くの人亡くなり、国のために働いても家族が帰ってこないじゃないかということで、お国のためではなくて、自分のために生きるという個人主義的な考え方が広がります。一方で憲法によって民主主義国家となり政府に対して物を言うことも覚えました。政府にちゃんとやると言うことで、自分たちで村のために働くという発想は持たなくなりました。そのような考え方の人が増えると、行政の役割が増えます。住民もやってくれという目で見ます。その事に答えないと次の選挙に当選できませんので、頑張るために予算を増やし、職員の数を増やし、大きくなっていきました。このことにより、住民たちは行政に対する依存ということを覚え、ヨーロッパでも話題になりました。政府が頑張れば頑張るほど、それに対する依存も高まり、政府は大きくなっていきます。一時期を政府の時代と呼んでいました。政府が隅から隅までどんな問題にも対応して、責任を負うということをやっていたので、大きくなるのも仕方ありませんでした。その分、住民の負担も増えました。しかし、このような時代は長くは続きませんでした。政府の時代を支えてきた高度経済成長が壁に突き当たり、低成長になっていくと、それまでの税収が入ってこないのに住民の要望が強いという状態がしばらく続きます。政府はどうしようかとなり、政府は行き詰まってしまいます。

それともうひとつの問題は、新しい行政需要や社会的な課題が発生してきたことです。公害の問題や高齢化です。いまや世帯で一番多いのは一人暮らし世帯と言われていて30パーセント。昔であれば集落でみんなで支えていくかもしれませんが、今は行政に目が向けられてしまっています。このように新しい問題に対して、そこに住んでいる人自身が解決していこうとする対応能力を持たないままに行政に向けられます。最初に壁に突き当たったのは行政で、資源が調達できないのです、要するに税金が上がらないということです。これまで通り

の住民の期待に応えつつ、なんでもきめ細かくやりますという、千葉県松戸市の「すぐやる課」ができて、3、4年の間に全国に広がりました、それだけ人気がありました。

しかし最初に住民が、諸問題に対し処理する力がなくなったので、政府を作って頼み、政府は大きくなっていき、予算もかかり人員も必要になり、それが担えなくなったら住民に返せばいいと思うかもしれませんが、住民の自治力というものが急速に低下していきました。これは政府が巨大化していくのと同じスピードで住民が自分たちで処理する能力を失っていきました。

そして今、政府の時代が終わりを告げようとしています。政府そのものを維持していく材料がありません。ですから、予算を抑えて人員を減らし、市町村でいうとおそらく数十万人辞めています。では、どうやって地域を維持していくのかというと、そこで出てきたのが協働という考え方です。極端に申しますと、政府が行き詰まったから住民の力を借りようとして、それを協働と呼び、英語では partnership (パートナーシップ) と言いますが、それで解決しようとしたわけです。全ての市町村と言っていいほど、長期計画に協働という言葉が出てこない自治体はありません。しかし、ひとつ間違えると行政ができないことを住民に投げたとも言えます。日本協働政策学会という学会でも議論していますが、そこを克服することはなかなか難しいです。つまり学会によって時代が変わるということはなく、実際に取り組んでいる自治体と住民がこれまでの関係を変えていくかが問われています。そういった意味で、先程司会者からありましたが、2月には瑞穂町全職員に協働の研修を行いました。全職員に同じ研修を受けさせるというのはなかなかありません。おそらく、それだけ協働に思い入れを持っているんだろうなと考えていますが、そこで私が強調したのは、住民が行政に協力するものではありませんということ。ですから、行政の方からやりたいことを決めて協力してもらうために協働を振りかざすのは良くないです。住民が自らやることに対して行政がそれに協力するという立場が協働です。したがって住民たちがやろうと言い出すかどうかはまず分かれ道で、そしてやろうと言った時にどんなことで手助けできるのか、例えば活動費を助成するとか、情報を提供するとか、場所を提供するとか。葛飾区では、閉校になった小学校の跡地を住民たちが自由に設計して、そこに森を作るというプロジェクトを作って活動しています。行政との協働は、学校の跡地を自由にして良いという決定をしたということです。もちろんその活動に予算がついているとは思えませんが、みんなから寄付を集めて森を作る活動を行っています。ですから私が研修で言ったことは、住民が行政に協力するという発想ではなく、住民たちの作業に行政が協力するというところでやっていただきたいと申しあげました。

それでは、積極的な住民はどこにいるんだということですが、私は住民は3つの顔があると思っていて、主権者・消費者・共に公共を担う人々、俗に言うNPOです。これが増えてきています。例えば一番多い事例だと、お年寄りの家庭への配食サービスを始めた人たちです。最初に聞いてみましたら、どこかのお宅の台所を借りて、給食を作っていたのですが、今では多いところで100食作ったりしていますので無理ですよね。一般家庭の台所では無理なので、役所に相談します。そうすると助けようとなり施設を貸してくれて、最初は水道代やガス代は団体もちとなるかもしれませんが、やがて社会性を認めた場合には無料で

使わせることも考えるようになります。これは主権者からの提案に答えただけではなくて、一緒につくっていく動きというのを協働という領域で考えてはどうか。

このように主権者や消費者だけではなくて、共に公共を担う人々から協力を要請されたら、どんな協力ができるか考えなければいけません。ある実話なんです、ある自治体はその配食サービスを見て、新しい需要だと捉え行政の施策としてサービスを始めました。NPOがやるように1食500円で運営するのは行政としてなかなか言いにくくて、無料でやってしまいました。そうするとNPOの活動が潰れます。つまり行政が良かれと思ってやることには税金を使いますので、NPOのように自力でやっている活動と対等してはいけません。行政は、どんな協力ができるかと考えるべきです。例えば、今は個人情報管理が厳しくなっているので難しいかもしれませんが、当時で言えば、対象となり得そうな高齢者のリストを団体に示すとか、様々な方式があるかと思えます。このような協働を目指していくということです。

それでは時間も迫ってきましたので、協働を進めるための課題を何点かお話しします。どうやって団体と行政の協力関係を作るのかというと、先程の配食サービスの話で言いますが、福祉関係の担当部署に調理をする場所がなくて困っているんですと相談に行くと、一般的にはその部署の関係団体にされてしまいます。また、活動費を助成するとなった場合でも、委託金となって下請けにされかねないんです。つまり、何を協働するかを決めるのは行政だけの判断で決めてはいけません。今全国で行われているのは、提案を受け付けて、行政の担当者に伝え、さらにそれを決定するのは有識者とと言われる市民の代表者であり、有識者に対してプレゼンテーションをして説得をして、有識者会議で選定します。言わば、行政からお墨付きをもらって協働が成り立つという形ではないものを作っていく必要があります。その背景にあるのは、公開性だと思います。どのようにして決まったのか、なぜそこに決まったのか、みんなにわかるようにすることが重要です。

二番目に、住民たちやNPO団体や住民グループにも課題があります。活動するための仲間作りや今やっていることを活動として結びつけるための情報が必要であれば、色々なところに相談してみるということです。何度も言っていることですが、住民側も行政の下請けにはならないということを肝に銘じておくことは大切です。下請けになってしまうと協働疲れになり、安く使われていると気が付いた瞬間に力が萎えてしまいます。

最後に、行政がどういう風になる必要があるかということ。行政も執行権の行使と言われることがたくさんありますが、この領域に関して言えば、執行ではなくコーディネートする役割に徹していきます。また、行政には何でもやってやる、任せろという意識があるんですが、これからは一緒にやろうというような言葉に変えて、やってやるというのは禁句です。それから行政への注文ですが、人事についてです。協働を一緒にやろうとなって、職員とも良い人間関係が作られていく可能性があります、しかし、3、4年経てば異動してしまうということもあって、なかなか定着して育たないということもよく言われています。これは住民の方には関係のないことで行政自身が解決していくことです。今話したようなことを2月の職員研修でも話したので、少しずつ理解が増えていくことを希望しています。

最後になりますが、どうして協働なのかと言いますと、役所が行き詰まって大変だろうから

助けてあげようというのにも一部にあります。それはあって当然です。なぜかと言うと、ここは自分たちの作った町なんだからということです。同時に、役所がうまくいかなければ困るのはその地域であって、その地域を良くしていく役割を自分たちで担うということです。これについては、学者の中でも意見が分かれています。かつて自分たちで政府を作って、そこに仕事を預けていましたので、その仕事の取戻しだという意見もあります。住民に取り戻す力が付いたら取り戻してもいいですが、役所の仕事はお金もかかるし能率も悪いと言われるので、それよりは自分たちでやったほうがいいと思うかもしれませんが、それは重過ぎるという意見もあります。いろんな意見が交錯する中で、新しい地域づくりのひとつの手法として協働が注目されていますし、進められています、ということをお伝えして終わりにしたいと思います。どうも、ご清聴ありがとうございました。

(司会・栗原) 辻山講師、貴重なご講演、誠にありがとうございました。ここで、一旦休憩に入りたいと思います。11時50分から推進委員による活動発表を行いますので、よろしくをお願いします。

<休憩>

協働事例紹介

(司会・栗原) それでは、時間になりましたので、次の事例発表を始めさせていただきます。まず、瑞穂町協働のまちづくり推進委員の井上委員による活動事例発表を始めさせていただきます。井上委員は瑞穂町の新規就農者であり今年度から推進委員として協働に関わっていただいております。それでは、よろしくお願いします。

(井上委員) こんにちは。ご紹介いただきました井上と申します。去年から協働推進委員ということで活動させていただいています。今回は「狭山池上流部をひまわり畑に」ということで、協働の事例発表となっています。まず、自己紹介からさせていただきますと、瑞穂に来て6年ほど新規就農という形で農業をやっています。幼稚園、スーパー、瑞穂町内の直売所などに出させてもらっています。それで、休ませている畑をひまわり畑にして、それを油にして売ってはどうかということで毎年イベント化して、販売していました。瑞穂町の農政係から農地を回廊計画の一部として花畑にしませんかという話をいただきまして、今まで自分の畑で点々とやっていたひまわり畑を町が借りている狭山池上流部の畑でやらせていただくことになりました。広さは4000平方メートルという広い畑で、資料の一番後ろの地図を見ていただくと、赤い丸が付けてあるところ、八高線の沿線沿いで、景観もいい場所で一緒にや



りませんかと言われ、町と協力してやることになりました。4000平方メートルとは反で表すと、4反になりまして、結構広い畑です。なので自分ひとりでは難しいので、二人の農家さんとJAの青壮年部が協力を申し出てくれたので、巻き込んで去年からやっています。一部、東京都の補助金を使わせていただいて、チャレンジ農業支援事業という専門家派遣でデザイナーの方も関わっていただきました。また、福祉事業所の「さくら」と「ひまわり」、ボランティアセンターからボランティアの方も入っていただいて、周りの農家さんも手伝っていただきながら始めました。補助金で一部やったところなんですが、町と青壮年部と農家で何回か話し合いをして年間スケジュールを立てて、イベント用のTシャツを作り、集客のためにデザイナーさんにはチラシを作ってもらって、農協の各支店と町役場でチラシの配布をもらって、去年の4月から始めています。

線路沿いに蒔くということで、畑にはごみと石が多くて、まずはそれらを拾うことから始めまして、周りの農家さんが拾ってくれたり役場の方が草刈りをしてくれたり、色々な方に協力してもらいながらスタートしました。本当は一面、土という状況が良いんですが、雑草が分解されずに残っている状況で始めました。町民農園をやっている方も一緒に種を蒔いてくれて、約4万粒蒔いて、ほぼ手蒔きです。ボランティアセンターと高校生も来てくれて、一緒に種蒔きをしました。

実は資料の写真をみるとわかるんですが、失敗している形なんです。本当は雑草が生えずにひまわりだけになります。ひまわりが大きくなって、雑草が生えないから、ひまわりだけがきれいに見える予定だったんですが、予想外に雑草が増えてしまいました。本当は周りだけ草刈りを1回やって終わりなんですが、3か月の間に3回ほど草刈りをする羽目になりました。このような状態で心配でしたが、周りの方の支援もあり、なんとか7月にはひまわりが見える形にできました。4万粒蒔いたんですが、3万粒は芽が出ず1万だけしか咲かないという状況でしたが、見た目的には悪くないかなというところまでもっていけました。これをやっている間に役場の方に掛け合っていただきまして、瑞穂町の工務店の方がやぐらを提供してくれて、上から見渡せるようにするために設置してあります。瑞穂町と農協の各支店にチラシを配ってもらったので、お客さんにも来ていただいて、5月に種を蒔いて、7、8月に景観を楽しんでもらって、9月に種を収穫しました。これまた瑞穂町の古いお宅から提供してもらった唐箕（とうみ）という、ゴミと種を分ける機械に3回ほど通すと、種だけになります。種になったものを業者に出します。搾油する方法はいくつかありまして、薬につけて搾油率をあげて搾油する方法と、焙煎して搾油率をあげる方法があります。今回は自然のままのものということで、ただひたすら圧縮だけをして絞り出して、その後、3、4回ろ過をして綺麗な油にしました。もし良かったら展示室のほうに、搾油した後のかすがあるので見てください。そのかすも最終的には畑に戻し、肥料になります。

この瓶詰した油もラベルがないと製品化できないので、事業所と製作者と賞味期限を入れて販売できるようにして、最終的には種を蒔くところから販売するところまでをイベントにしています。ちなみに、新宿にある農協アグリパークに置かせてもらって、販売しております。去年から町と青壮年部と一緒にやっているんですが、今年もやる予定なので興味がある方は連絡してもらえればと思います。役場や農協にチラシを置くので、そこに連絡先も書いてあ

ります。年々良くなっていけばいいなと思って活動しているので、良かったらお越しください。

去年やったのは収穫だけのイベントをさせてもらって、有料で油1本プレゼントという形になっていました。できれば種まきから経過を見てもらいたくて、農家の畑でイベントをしたいと思っていて、3月か4月にチラシを配りたいと思っていますので、そこから来ていただく長く畑を見てもらって、最後の油を配るところまでをイベントにしたいと考えてますので、ぜひご参加いただけたらと思っています。以上で事例発表ということで、町と農協と町民の方で行った活動として話させてもらいました。ありがとうございました。

(司会・栗原) 井上委員ありがとうございました。それでは、準備をいたしますので、お待ちください。

<準備>

(司会・栗原) お待たせいたしました。続きまして、瑞穂町協働のまちづくり推進委員会中沢副委員長による活動事例発表を始めさせていただきます。中沢副委員長はボランティア団体である西多摩マウンテンバイク友の会の代表であり、4年ほど前から様々な協働推進活動にご尽力いただいております。それでは、長岡地区の樹林地整備活動についての活動事例発表です。よろしくお願ひします。

(中沢副委員長) 皆さん、こんにちは。最後の最後で疲れているかもしれませんが、ここから話す話は瑞穂町の皆さんだけでなく、多くの方にとって非常に生きていく上で役に立つことではないかなと思っています。私は瑞穂町協働のまちづくり推進委員会の副委員長、また推進委員会の前身の瑞穂町の協働を考える委員会から関わってまして5年になります。もうひとつ、瑞穂町きらめき回廊のルート整備部会の部会長も務めております。どのように協働に関わってきたかということをしっかり話したいと思います。

長岡地区樹林地整備の場所というのは、国道16号、八高線、岩蔵街道あたりの樹林地です。とても大きな林をどのように整備をして、何をしたいのか、そしてなぜこれが協働なのかということをお話ししたいと思います。



私はマウンテンバイクショップ中沢ジムというのを2000年から南平で経営しております。レースやイベントをやっているんですが、その中で西多摩マウンテンバイク友の会というマウンテンバイク愛好会によるボランティア団体がありまして、里地里山の整備活動や自然公園などのイベントの手伝い、道の保全活動、地域のお祭りの手伝いなど多岐に渡っています。会は発足して8年経っておりますが、会員数は30

0人、昨年の活動は80回行い、述べ1000人以上が参加しています。このメンバーを中心に長岡の平地林を整備していますが、町役場の方や議員の方とも一緒に協力しながら整備をしています。

私はマウンテンバイクという趣味が高じて店をやっているんですが、もともと足立区出身で瑞穂に越してきたんです。身近な自然があって、マウンテンバイクに乗っていて楽しいところなんですね。ですから、店を瑞穂町とか福生あたりに出したいなと思っていました。

狭山丘陵の六道山公園の落ち葉がさくさくしたような道を走るのが楽しくて、好きでやっているんですが、瑞穂町にも魅力があるポイントがたくさんあります。例えば、カタクリの花でこれからがシーズンになります。あとは狭山茶であったり、富士山が見える場所がたくさんあります、そして桜のスポットがあって、町でも桜つながるマップというものを作って皆さんが楽しめるようなルートをアピールしています。自転車で町を走る中で、16号バイパスのみずほモールに行く途中の陸橋から見た風景は、線路が一直線で綺麗だということ、また大きな森があり、越してきたばかりの2001年に見た時にはびっくりしました。林の中に入ってみると、八ヶ岳や軽井沢の別荘地のような素敵で風景でしたが、少しうっそうとしていたり、逆に人の手が入って綺麗になっている町の保存樹林地となっている場所があったりして、森全体を整備したらおもしろいじゃないかなという思いを持っていました。そんな時に町の方から、協働というものを始めるので委員会に関わってくれないかという話をいただきまして、委員会の中で辻山先生から講演をいただき、とても響くものがありました。要するに、自分たちのことは自分たちで一歩前に出てやる、それを行政と連携してやるという部分が印象深く、いつか森を整備するのに使えるんじゃないかと思いました。また、マウンテンバイクには、山道を勝手に走って道を痛めるなどか、車を勝手に止めるなどか、様々な問題があり、山から締め出された歴史があったんですが、それに対しても自分たちが一歩前に出て、地権者の方や自治体と話をすることで問題解決できるんじゃないかというようなヒントを辻山先生からいただきました。

そして、協働を考える委員会から推進委員会になった時に、ちょうど3年前ですかね、フォーラムの1回目を開催するにあたって、多くの方に協働を理解していただくためには、ひとつの事例があったほうが良いということになりまして、長岡平地林整備を協働にしたらどうかという話をさせていただきました。そこで色々な話をする中で、企画立案は住民とボランティア団体、地権者との交渉・コーディネートは役場建設課と地域課、狭山丘陵を調査している自然科学同好会の方たちからのアドバイスも必要であろうということで、地域課に紹介していただいて、お話をさせていただきました。道に落ちているゴミ関係は環境課に相談に乗ってもらいました。そして、実際の現場での作業はボランティア団体という形で活動がスタートしました。まずはうっそうとした森を明るくしていこう、明るい形にするだけでボランティアとして活動した時に気持ちが悪かったりしますし、長期的な経過も大事なんですけど、短期的な目標として綺麗にすることを始めました。ただ、綺麗にするだけだと、もともと生息していた鳥や生き物にとっては良い面だけではないので、先ほどの自然科学同好会から指導していただきました。

1年を通して定期的な活動をしていますと、四季折々、林がいろんな顔を見せてくれます。

この歳になっても学びがあります、ただマウンテンバイクで走っていただけではなくて、自分が関わることで未来が見えてきて楽しいなと思ってきました。夏は林の中というよりか、道まわりを綺麗にすることが多いです。また、子供たちと落ち葉を集めたり、学芸員さんに花や生き物のことを聞いて、メモを取ったりしました。落ち葉掃きに来る親子もいますし、子供はボランティアという感じではなく、遊びに来ている感じです。活動の意味とか意義は後から付けばよくて、とりあえず現場で協力して一緒にやろうでいいと思います。エコスタックという落ち葉貯めを作って、たい肥を作ってみたり虫が住むようなものを作ったりしているので発展性はあるのかなと思います。

落ち葉貯めをひとつ考えてみても、みんなで協力して作り、貯めた落ち葉をたい肥にしたら近隣の農家さんに買っていただくとか、木を切ったものをチップにして公園の道に敷くとか、切った木をしいたけのホダ木に使うとか、要は循環型にしていく。ただ、綺麗にして終わりではなくて、もともと里山にあった人間が身近な自然を利用していた頃を取り戻そうというテーマでやっています。ですけど、実際にここに来たらみんなで遊んでいる感じなんですよね。楽しみの中から、聞かれた時には意味を答えられるようにしています。そして、継続性がなければボランティアは続きません。継続するためには食べ物なんです。ボランティアは食べ物が大事です、みんなで美味しいものを食べるとハッピーになります。ここでは、近隣の農家さんから分けていただいたものだとか、あとは将来的にはきのこが採れたり、山菜が食べられたらいいなと思います。そして、これだけ明るい森にしたら次に何ができるかというと、人が繋がってきます。家族が繋がり、地域の方が協力してくれています。この周りには障がい者施設やお年寄りの方の施設がありますので、少し野外に出てみるチャンスといいですか、場ができています。また町外からも人が来ます。ですから、自然の中でみんなで楽しむと人が繋がって地域の繋がりが出てきます。そして時間軸が繋がるといいます、過去の歴史と現在と未来ですかね。実際に活動するにあたって、地権者の皆さんに説明をする時に、ボランティアに何ができるのかと最初は言われるんですが、継続して活動をして話をしていくうちに良くやっているとってもらえます。そして、70代の方は50年前の話を楽しそうにして、子供の頃はよく遊んだというような話をしてくれます。嬉しそうに話すということは、もともと大好きだったんだなと、瑞穂町のこういった場所が好きだったんだなと思います。そうしたら、それを若い世代が関わって楽しみながらみんなで作ったらどうだというのが、この活動であります。

議会の皆様にもお手伝いいただきまして、議員の皆さんも瑞穂町出身だったりするので、非常に楽しく作業していただきました。また、議会の皆様に活動を知っていただくことで、より多くの方に知っていただいて、町づくりの一環としてできるのかな、回廊計画のルートのひとつになるんじゃないかなという思いを持つことで、活動する側もやる気が上がってきます。

話は変わりますが、今年の夏に活動した時に、きのこがたくさん出てきました。食べられないんですが、町の学芸員に聞いたところ、このきのこがいるから木が生きていけるとのことでした。ボランティアの方々が落ち葉を掃いてきのこが出たことで、そばにある松の木やナラの木と共生しているそうです。木は光を取り入れて、そのエネルギーをきのこに送る、き

のこはそのもらったエネルギーを活かして養分を木に送る、また、病原菌から守る菌を送っているそうなんです。土の中で見えないからよくわからないんですが、実はそういったことが起きているそうなんです。何を言いたいかというと、見えないところで繋がっている、お互いが共生して生かし合っているというのは、先ほどの辻山先生の話にもあった協働にも近いんじゃないかなと。行政がきのこで僕らが木なのか、その逆なのか、わかりませんが、そういった気付きや学びがボランティアの中から繋がるということを今年は凄く感じました。きのこの話を聞いたときに凄く感動しまして、それぞれが役に立っているんだと、それを丁寧に伝える人がいればいろんなことが繋がっていくんだということを感じました。ですから町の方は非常に協力的ですので、皆さんの中にも何かやってみたくと思った時には行政の方に相談に行ってみるといいと思います。必ず話を聞いてくれる課があります。私のより詳しい活動はブースが出ておりますので、そちらの方に来ていただければより詳しい話ができるかなと思います。来年度は毎月1回の平日の活動から2か月に1回休日の作業をプラスして活動していきます。皆さんが活動しやすい形を作っていきます。私の発表はこの辺で終わらせていただきます、どうもありがとうございました。

(司会・栗原) どうもありがとうございました。それでは次に辻山講師から総評をいただきたいと思います。辻山講師よろしくをお願いします。

講師総評及び各委員紹介

(辻山講師) 実際の活動の話を知るとわくわくしますね。最初のひまわり畑の報告ですが、行政からアプローチがあって、その時の行政の狙いは何だったんだろうと思いました。おそらく、東京都が進めている空き地域活用といった事業の一環としてやっているんだろうという気がしているんですが、農家の組織にというよりか、やる気のある人たちが始めたところがおもしろいなと思いました。これからは成果をどのように社会に還元していくか、あるいは自らの所得にしてもいいんですが、たくさん参加してくれたボランティアの人たちと成果を共有していく姿勢が大事なんだろうなと思いながら聞いていました。

次の樹林地整備については、繋がるというキーワードが何度も出てきました。実は政治学会のキーワードも繋がるというのがひとつなんです。人と人がどう繋がって、政治が展開されていくということ、あるいは、地域で人が繋がる。今日も発表の中で、人と人が繋がる、過去と現在が繋がる、できれば現在と未来が繋がる、高齢者と子供が繋がる、活動団体と行政が繋がる、様々な意味で繋がるということ。その基本になっているのは、そのボランティア団体の絆で繋がれているということ。

現在、私たちの社会で一番欠けているものは繋がるということ。この重要性に早く気が付くべきだと考えています。たくさん報告を受けて私も勉強になりました。そういう意味では協働事業の可能性を見せてくれた報告だったと思います。

(司会・栗原) 辻山講師貴重なご意見、ありがとうございました。最後に協働の町づくり推

進委員会の委員紹介をさせていただきます。委員の皆様、前にお集まりください。

<委員整列>

(香取委員長) 私は先程挨拶させていただいた香取幸子と申します。二本木と箱根ケ崎で家庭料理をやっております。耕心館でつるし雛の開催期間中、外の通路のところでお弁当販売をさせていただいておりますので、もし良かったら手作りのお弁当を味わってください。今日はありがとうございました。

(中沢副委員長) 南平でマウンテンバイクを中心とした自転車店を営んでいます中沢清です。体験学習室の前で協働に関するブースとマウンテンバイク友の会のブースを出しております。顔を出して、聞きたいことがあったらなんでも良いので聞いてください。今日はありがとうございました。

(小松) 瑞穂町バスケットボール連盟の小松と申します。スポーツで瑞穂町を元気にできればということでこの活動をさせていただいております。今後とも皆様よろしく願いいたします。

(小山) ボランティアセンターの小山と申します、今日はパネルの展示をさせていただいております。一番最初に委員長のお話の中にもありましたが、サロン活動とって、町内ですべてでもだれでも立ち寄れるような居場所づくりのような活動のパネルを展示しています。今日のフォーラムをきっかけに何か心に残って、瑞穂町を少しでも楽しくて良い町にするような活動になっていったらいいなと思っています。今日はありがとうございました。

(豆田) 二本木に住んでいます豆田と申します。私はいろいろな国の言葉を赤ちゃんのように自然に身に付けていくというヒップファミリークラブを瑞穂町で主催しています。今日はブースを会議室のほうで出していますので、もしよろしかったらご覧になってください。推進委員としては2年目ですが、私たちの活動の中で見つけたことが子育て事業とかに関わればいいなと思っています。今日はありがとうございました。

(田中) 私は瑞穂の高根に住んでいる田中と申します。推進委員になって今年で2年目になります。少し協働の町づくりがわかってきたような気がします。微量ながら地域に根付いた活動をしていきたいと思えます。みなさんの協力を得て、私なりにいろんなことをやってみたいと思えます。今後ともよろしく願います。

(井上) 先程はありがとうございました。井上です。あのような発表は慣れていなくて、実は何を言ったか覚えていません。僕もブースを出しているので、詳しく聞きたい方は来ていただければ、お話しますので、よろしく願います。

(石川) 自立支援センターすだちの石川と申します。知的障がいの方のグループホームとショートステイをやっております、今日はどうもありがとうございました。

(司会・栗原) 委員の皆様ありがとうございました。それでは席にお戻りください。本日は皆様お忙しいところ、お集まりいただきまして誠にありがとうございました。協働のまちづくりについて少しでも理解していただき、興味を持っていただけましたでしょうか。今後、町と住民が協力して多くの協働活動を行っていくことができれば、瑞穂町がより魅力のある町になるのではと思いました。町としても更なる協働の推進に取り組んでいきたいと思っております。こんなことやりたいとかやってみたいということがあればまずはお気軽に地域課のほうにご相談ください。そして一緒にできることを考えていければと思っております。また、講演前にもお伝えしましたが、アンケートが封筒の中に入っていると思いますので、そちらをご記入していただき、受付にあります回収箱に入れていただきますようお願いいたします。その際に鉛筆の返却もあわせてお願いします。この後は1階会議室、体験学習室の前の廊下、外のあずまやで活動紹介のパネル展示や体験コーナーで各委員がお待ちしております。15時半まで解放しておりますので、ぜひお立ち寄りください。その際に、本日の活動事例発表の内容や質問などをお聞きいただければと思います。それでは、以上をもちまして瑞穂町協働フォーラム2018を終了させていただきます。ありがとうございました。



アンケート集計結果

※回収数35枚

1. どのように今回のフォーラムをお知りになりましたか

・フォーラムちらし	9
・広報みずほ	1
・SNS（フェイスブック、ツイッターなど）	4
・友人、知人からの紹介	16
・みずほケーブルテレビ	0
・その他（町ホームページなど）	5

2. 今年で3回目のフォーラム開催でしたが、何回目のご参加ですか

・はじめて	24
・2回目	7
・3回目	4

3. ご参加いただいた理由をお教えてください（複数回答可）

・基調講演や協働事例発表のテーマに興味があった	18
・協働について知りたかった	8
・友人、知人からの紹介	8
・けやき館という場所が行きやすかった	1
・つるし雛目的で来た	8
・その他	1

4. 良かったと感じられた内容をお教えてください（複数回答可）

・基調講演の内容	15
・協働事例紹介の内容	19
・協働ブース	7
・つるし雛との同時開催	12
・その他	0

5. このフォーラムで「協働」に対して、どのような印象を受けましたか（複数回答可）

- ・興味を持てた、協働してみたい（行政や地域団体と何かやってみたい） 1 4
- ・現在、地域で行っている様々な活動が協働だと気付いた 1 3
- ・協働という言葉は初めて知った 9
- ・協働について、いまいちよくわからない 1
- ・その他 3

6. 様々な団体や個人と一緒に活動していくためには、どのようなことが必要だと思いますか（複数回答可）

- ・相談できる窓口があること 1 7
- ・地域で活動している団体の情報が得られること 2 6
- ・団体同士の交流の機会があること 9
- ・会議等を行える場所があること 4
- ・その他（積極的な周知活動） 1

7. 自由回答欄：何か町とやってみたい事、瑞穂町をこういう町にしてみたい等

- ・つるし雛目的で来ましたが、お話が聞けて、協働のまちづくりを考える時間が持てました。
- ・20年程前まで瑞穂町で勤務していたが、このような催しがあることを知りませんでした。
- ・つるし雛がとても素敵で良かった。華やかで春らしくて楽しめました。
- ・他自治体の例や違う講演を聞きたい。
- ・新しいテーマの講演。
- ・つるし雛と同時開催は良いアイデア。
- ・協働をしている情報をもっと広く住民に知らせてほしい。こんないいことなのにもったいない、やってみたい。
- ・つるし雛が見られて良かった。賑わっているのはいいと思います。ブースの場所がちょっとわかりづらい。
- ・瑞穂町で活躍している様々な団体の紹介。どのような団体があって、どのような活動をしているか知りたい。

- ・講演後、質問時間が必要ではないか。
- ・協働研修をした後なのに、協働事業にほとんど自治体の職員が参加していない。勤務時間外は働かないということでは、住民との協働はできない。
ふたつの事例発表が大変良かった。
- ・つるし雛との同時開催は大変良い。次回フォーラムは西多摩マウンテンバイク友の会の活動と協働を聞きたい。
- ・興味深いお話でした。
- ・瑞穂町自然科学同好会の活動について聞いてみたい。
- ・フォーラムの存在自体の周知が不十分だったように感じます。過去の会に比べ、減少傾向にあるのはなぜでしょうか。